

またも謀略によって引き起こされた

上海事変

日本人僧侶襲撃される!

満州占領への国際批判をそらすため

日本軍の満州占領に、世界中で厳しい批判が高まったため、満州国承認にとって障碍になりました。そこで、国際社会の注目を満州からそらすため、関東軍と日本の上海領事館の武官が共謀して、上海での謀略を仕掛け、それを口実に「上海事変」が引き起こされました。

上海で高まる抗日運動のなか

この満州占領は、中国民衆の抗日運動の高まり、とくに中国最大の工業都市上海では、革命的伝統が根強く、民族意識に燃える多く生労働者が集中しており、抗日運動がもっとも高まりをみせていました。さらに軍を後ろ盾にした横暴な行動の多かった日本人と中国人との対立もはげしくなり、こうして上海の情勢が緊迫する中で、満州事変同様の謀略がおこなわれました。

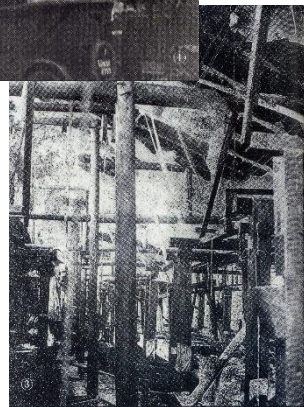
上海での満州援助・抗日人民大会 壁に書かれた中国人民の抗日の意志



上海での一つの謀略とは、「日本人僧侶の襲撃事件」でした。上海駐在陸軍武官・田中隆吉少佐は、関東軍の依頼を受けて、1932年(昭7)1月18日夕方、上海の江湾路にある日蓮宗妙法寺の僧侶が托鉢寒行で廻っているとき、買収された中国人の手で狙撃され、2人が重傷、1人は後に死亡しました。

戦後、田中の供述によると、「上海で三友実業公司(毛織物工場)は共産党の影響が強く、抗日運動の根拠地と見なされていました。その工場の名前を使って日本僧侶を襲撃させる工作をしました。一方、憲兵大尉・重藤千春に指示して、日本青年同志会を指揮して三友実業公司を襲撃させ、工場を焼き、付近の警察交番に乱入、中国人警官を死傷させた。」と語っています。こうして中国の抗日分子と日本人との抗争という事件に仕組んだものでした。この騒動を口実に上海事変は勃発しました。

日本軍に焼かれた三友実業会社の工場



(写真は『中国抗日戦争図誌』上巻(柏書房)より)

(写真は『写真記録中日戦争』2巻(ほるぷ出版))

日本軍の爆撃で廃墟となった上海市街



(写真は『中国抗日戦争図誌』上巻(柏書房)、『写真記録中日戦争』2巻(ほるぷ出版)より)